

権兵衛の鋤ごんべえ くわ

資料提供・文 国枝 浩



「権兵衛は朝早くから鋤を担いで…」
昔話の始まりに出てくる百姓（農民）生
活の模様です。

今は田畑の作業はトラクターで、家庭
菜園の人でもミニトラを持ち、それにス
コップ、レーキ、フォーク、プラウ（三角
鋤）等、外来の道具で、権兵衛のような姿
は見受けなくなりました。

それが昭和時代までは、ずっと伝来の
農具で、耕起するには備中鋤、地ならし
や畝作りには平鋤で、朝から晩までかか
りました。

池田町の田畑の土は、山沿い地域は砂
礫の多い壤土ですし、そうでない地域は
反対に埴土や砂質壤土などで、それぞれ
に合った農具で、鋤の柄にしても、その
角度も異なっています。

礫の多い土地では「ビワノハ（唐鋤）」
という鋤で、固い土を荒起しをしてから
「三ツ鋤」という三本歯の備中で細かく
しましたし、礫や小石の少ない土地では
「四ツ鋤」といって、四本歯で先が撥型に
開いたのを使いました。又、權の形に似た
鋤も使いましたが、砂壤土では鋤簾です。

又、稲を作る水田は、畔からの漏水を
防ぐ為、田の泥を塗る為の畔鋤と畔塗鋤
が必要でした。

昭和50年代に、県営大規模基盤整備圃
場事業（略称土地改良）が、全町に亘っ
て行われ、用水、排水、農道が整備され、
畦畔もコンクリートや波型プラ板が使
われるようになって、辛い畦塗り作業も
なくなりました。

当時まで使った農具も、今は錆びるに
任せ、レトロ館よりも骨董品ですね。

【語句説明】

「埴土」砂などを含まない粘質で保水性
の土。PH5以下位

「壤土」砂礫質壤土とか砂質壤土と呼ぶ
排水性の土。PH5以上位

協力 郷土史の会